与野南小だより

7月号　令和7年7月1日発行 第4号

さいたま市立与野南小学校　【児童数】計375名
電話 831－0157

思考を止めないという選択

校長　土屋　智樹

今、世界各地で「分断」や「対立」という言葉を耳にする機会が増えています。立場や信条の違いから対話が成り立たず、相手の声に耳を傾けようとしない空気が広がっている。そんな現象が、国際社会だけでなく私たちの日常にも静かに影を落としているように感じます。

けれども、こうした分断は決して遠い世界の出来事ではありません。私たちは誰しも、好ましいと感じる人や少し苦手だなと思う人がいると思います。それ自体は自然なことです。しかし、もし「嫌いだから」「どうせあの人とは合わないから」と思考を止め、相手の立場や思いに耳を傾けようとしなくなったら、そこから生まれるものは、他者への理解の喪失、関係の断絶といった、つながりを閉ざす結果です。

これは学校という小さな社会の中でも起きうることです。実際、子ども同士のトラブルに向き合う中で、「相手が嫌い」「自分は悪くない」といった感情や先入観を優先して対話を拒む姿を目にすることがあります。これこそが、「思考停止」の入り口です。その瞬間に、互いに理解しようとする芽が摘まれてしまい、解決が難しくなるのです。

また、思考の芽を止めてしまうのは子どもたちだけではありません。私たち大人もまた、無自覚のうちにそうしている場面があります。例えば、子どもたちの問いかけに対して、「そういうものだから」と答えてしまったり、失敗しないよう先回りしてしまったり・・・それは、子どもたちの考える力を育てる貴重な機会を失ってしまう瞬間でもあります。

思考停止の怖さは、静かに、しかし確実に、人々のつながりや自分自身の成長の可能性を狭めてしまうことにあります。異なる考えに出会う機会が減り、想像力や共感の力が育ちにくくなると、気が付かないうちに「自分で考え、対話する力」を手放してしまっているかもしれません。だからこそ、私たちは常に「これはどういうことなのか」「なぜそう思うのか」「他に見方はないか」などと、立ち止まって考える姿勢を忘れてはならないのです。

南小では、子どもたちに身に付けさせたい４つの力のひとつとして「自主性」を掲げています。この力は、自ら問いを持ち、次にどう行動するかを考える力にほかなりません。そしてそれは、「思考を止めないで自分の頭で考える力」と言い換えることができるでしょう。

そのために、私たち大人ができることのひとつは、「Ｙｅｓ／Ｎｏ」で終わらない問いを意識し、子どもたちと共に考える時間を創り出すことです。どんな些細な問いであっても、それを大切にしようとする姿勢が、思考と対話を支える土台になると信じています。私たち教師も、学校という小さな社会の中で、好き嫌いの感情や無自覚な先入観を乗り越え、その奥にある思いや背景に目を向けようとする営みを続けていきたいと思います。それが、思考を止めないという選択であり、私たちの社会を希望のあるものにしていく一歩だと、私は信じています。皆様はどのように思考を育み、誰かの声に耳を傾けていますか。